

ふたつの和

柳坐 和亀

夏休みになった校庭の片隅で

モクレンの老木に一輪だけ白い花が咲いた

いつからか

花の傍らに一匹のセミが寄り添い

綺麗な声で歌うのだった

小学校のシンボルは楠の巨木

そこに降る蝉しぐれは

ひとつの美声を掻き消してしまうが

灼熱の日差しの下

古びた校舎はただ沈黙していた

夕陽が沈むと夜のとばり

なおもやまない歌声は闇へと沁みる

すると花は妖しくひかり

それまでよりもほころぶと

花卉の奥へセミを招き入れた

夏が終わり

日焼けした子供たちが登校する頃

白い花は落ち

そのすぐ側で

セミは死んだという話

トタン屋根の下で

柳坐 和亀

川沿いにある掘ったて小屋の

トタン屋根の下で雨宿りをしていると

知らぬ間に

あどけない感じの少年が横に立っていた

何処かで見た気もするが

そうでない気もする

話しかけようかと迷いもしたが

トタン屋根が立てる雨音は

気まずい沈黙を消してくれた

それでもいちおう

私は少年と目を合わせ

小屋の中を覗いてその片隅を指さした

埃をかぶったおんぼる傘が

昔から存在するかのようになんて掛けられていた

少年はゆっくり頷き返したものの

立ち去る素振りは見せなかった

そもそも彼は

はじめから小屋の中にいて

私気付いていなかったただけかもしれない

好きにすればいいのである

ふたたび流域の風景に視線を戻したところ

こんどは少年が

黙って川の上流を指さした

その延長にあるものを

私はすぐに察知した
水嵩の増した濁流にのって
灰色の小さな物体が流れてくる
それは空気で膨らませた
ビニル製のおもちゃの飛行機であった
よく似たのを子供のころ持っていたのである
しかし失くしたのか捨てたのか
最後の記憶は残っていない
ゆつくりと流れてくる飛行機を
私はずっと目で追っていた
それは飽きることもない眺めであった
どうでもいいはずの飛行機は
過去の記憶を呼び覚ましてくれる
雨に煙っているせいか
厭な思い出までもが懐かしい
見えるのは過去だけではない
過去に見た未来までもが蘇った
飛行機は正面を通過し
やがて下流へと下ってゆく
そしてついに視界から消えようとするとき
思わず目をつむ瞑った
雨のトーンが俄かに上がる
どれだけ時間が流れただろう
この身は大気に一体化しているようだった
つい深呼吸をすると自然に瞼が開く
するとおんぼろ傘はそのままに
あの少年の姿は消えていた
午後の雨は降り続く
トタン屋根の下で
私はずっと雨音を聞いていたと思った